



日本現存最古の閘門式運河？ 高瀬川のたかせどお 高瀬通し

はじめに

近代以前につくられた土木構造物は、史料が乏しいことや、構造物自体が原型をとどめていないことなどが災いして、実際はどのような機能していたのか分からない場合があります。例えば岡山県倉敷市の船穂町にある灌漑水路「高瀬川一ノ口用水」は、かつて「高瀬通し」と呼ばれ、高瀬舟の運路を兼ねた多目的用水路でした。そして、地元では高瀬通しが、日本現存最古の「閘門式運河」だったと伝えられています。

閘門

閘門とは、水位差がある河川や運河に舟を通すための施設のことです。二つの水門と、その間の「閘室」からなります。

閘門の仕組みについて簡単に説明すると、水位の低い側（下流）から高い側（上流）へと舟を通す場合は、上流の水門を閉めて下流を開けるとは間違いとされています。このようにな誤りが生じた理由について岡山大学大学院の馬場俊介教授は、吉井水門や来原岩樋のような地方の近世構造物の存在が、中央まで伝わっていなかったこと、全国的調査がなされていなかったことが原因と考察しています。



復元された見沼通船堀の一の閘水門

高瀬通し

さて本題の高瀬通しですが、岡山県三大河川の一つ高瀬川の下流域にある堅盤谷から取水し、高瀬川右岸を玉島港へと通じる全長約10kmの灌漑水路であり、高瀬舟が通船する運河でもあったことから、「高瀬通し」と呼ばれていました。

堅盤谷にある取水口は、「二ノ口」といい、高さ約8.4mもある巨大な石造の水門の上に、江戸時代のもので伝わる水門小屋が建てられています。この一ノ口の下流約350mに

閘室内の水位は徐々に下がり、下流から舟を閘室に入れることができるようになります。閘室に舟が入ったら、今度は下流の水門を閉めて、上流を開ければ閘室内の水位は徐々に上がり、水位の高い上流側に舟を通すことができるようになります。このように、閘門式運河は二つの水門を巧みに開閉することによって、段階的に水位差を調整して舟を通していきます。

ざした形式になっており、吉井川と旭川を結ぶ倉安川の吉井川口に造られています。現状は二つの県道によって第一水門が川と閘室から分断されてしまっているものの、両水門の石垣などが旧状をよく残していることで、現存最古と評価されているようです。

第二位

有名なパナマ運河は、大西洋と太平洋を結んだ全長約80kmのうち、途中海抜26mのガトゥン湖を経由するため閘門が採用されています。

日本現存最古第一位

さて、日本の閘門を見ると、現存最古はパナマ運河より235年も前の延宝7年（1679）に完成した岡山市の吉井水門とされています。この水門は「高瀬廻し」と呼ばれる楕円形の舟溜まりを二つの水門で閉

次に古いものは、元禄13年（1700）完成の来原岩樋で、島根県出雲市の斐伊川左岸に造られました。「岩樋」というのは松江藩独自の名称で、岩盤をくりぬいて造られた土木施設をいい、来原岩樋は斐伊川岸辺の小山を全長約30mのトンネルで抜いて造られており、その中が閘室となっていています。さらにトンネルを抜けると、そこに円形の閘室を有するということ、2閘室からなる2段式の閘門であり、階段のように閘門を二つ連ねることによって、天井川である

る斐伊川との高低差を克服する工夫がされています。この岩樋は、トンネルなどに当時のノミの跡が多く残されているようです。

第三位

三番目は、享保16年（1731）に完成した埼玉県さいたま市の見沼通船堀で、灌漑用溜池だった見沼干拓事業に伴って開削された見沼代用水と、排水路として整備された芝川を、舟運で結ぶために建設されました。見沼代用水は途中で東西二線に分かれており、芝川はその中間を通っていました。通船堀は芝川を390m、西側は650m、閘門はそれぞれ一箇所設置されました。現在は閘門の復元工事が行われ、近世の閘門では唯一実際に舟を通すことができます。

しばしば、見沼通船堀は日本最古の閘門式運河と説明されますが、これまで見てきた通り、現在ではこれ



高瀬通しの二ノ口水門

「二ノ口」水門があり、高瀬通しはこの二つの水門とその間が閘室だった閘門式運河と伝えられています。現在でも灌漑用水路として機能していますが、一ノ口の水門は閉鎖されています。水路にはコンクリートの小橋がいくつも架かっています。実際に通船実験をすることができず、かつてどのように水門が役割を果たしていたか、知る術はありません。しかし、もし閘門式運河だったとすれば、高瀬通しの完成は延宝2年（1674）頃ではないかと推論されていることから、吉井水門よりも古い現存最古の閘門式運河の可能性もあります。

研究者の意見

しかし、一ノ口と二ノ口の間に約350mと長いことから、この区間が閘室であったことを疑問視する声があります。例えば、この区間で水位調整すると、多量の水が高瀬通しを流れ危険だとする意見です。



高瀬通しの一ノ口水門

また岡山大学大学院の馬場教授は、「二種の閘門ではあるが」とした上で、やはり「長さ350mもある閘室はあまりに非現実的で、一ノ口と二ノ口の交互開閉で水位調整を行っていた可能性は考えられない。むしろ、2基の不連続に配置された水門が、京都の高瀬川に造られた流量調整用の水門のように、取入口付近の急な流れを調整してただけのように思える」として、本格的な閘門式運河だったか確たる証拠はないと結んでいます。

『岡山県歴史の道調査報告書第三集』に記録された通船の方法によると、二ノ口水門を閉じると閘室の水位が上がり、高瀬川本流との通船が

地元の伝説

さらに馬場教授は、「一ノ口の水門は近代に入って改修されているので、近世の姿をとどめているとは言えない」と手厳しい意見も述べており、日本現存最古の閘門式運河を訴える地元とは乖離が生じています。

おわりに

このように高瀬通しでは結論が出ていないにもかかわらず、現地での表記や、地元の教育委員会の報告書などには、「閘門式運河」と断定的に書かれています。見沼通船堀においてもしかりで、今でも「日本最古」が一人歩きしているようです。しっかりとした調査研究がなされなかった結果なのでしょうが、高瀬通しの場合は閘門式運河ならば現存最古となるため、伝承の鵜呑みに拍車をかけたのかもしれない。

いずれにせよ「最古」「最大」「最長」などと書かれた近代以前の構造物の説明を目にした時には、「眉に唾をつける」つもりで、必要ならば最新の研究などを自分なりに調べてみるほうがよいでしょう。

（文：江口知秀）